



鹿児島・特別支援学校教員 淵之上 格

それは、私が転勤したばかりの40歳のときでした。初めて高等部教育を経験することになったのです。そこで会ったのが自閉スペクトラム症のある高等部2年男子生徒、哲さんでした。

哲さんは、一定の距離を保たないと友だちでも教師でもすぐに人を叩くクセがありました。あるとき、私が彼に叩かれているのを複数の男性職員が割って入り止めたことがあります。その夜、風呂に入ると傷がしみて、先生たちに囲まれた彼の姿を思い出して「ごめん」と、なんだかとても情けない気持ちになりました。

●負った傷を生きていぐ糧に変える

そんなこともあって、私は、文字の読める哲さんと筆談で会話することにしました。直接、担任から口頭で指示を受けたことにとても不安を感じているような様子が見られたからです。哲さんは、学校でなにをするにも不安や恐怖心がとても強い生徒でした。彼は毎日のように学校のなかで不安や恐怖心と闘い、自分自身を守るために人を叩かざるを得なかつたのではないか。私と筆談するようになつてから、哲さんは少し落ち着

いてあまり叩かなくなりましたが、私は相変わらず不愛想でした。

しばらくして、アニメ「ヤツターマン」が大好きだった哲さんは、特に悪役「ドクロベエ」の話し方、それと「おだてブタ」が気に入っていることを私は知りました。そこで、哲さんとの会話（特に指示）は、ホワイトボードに「おだてブタ」を描き、「ドクロベエ」口調で吹き出しを付けることにしました。大好きな「ヤツターマン」の世界なら不安な気持ちが少しづらぐのではないかと考えたからです。アニメの世界と現実の世界を交流させることで、現実の世界もまんざら悪くはないなど、彼に安心感をもつてほしいと思いました。

確かにこの方法はいろいろ試したなかでも秀逸でした。教室移動が苦手な哲さんでしたが、たとえば、私が「たいくわんにいくだべエ」とボードに書くと、哲さんはケタケタ笑いながらスマーズに体育館へ移動することができました。一方で、「ドクロベエ」に指示を出させて、それに哲さんは従つてはいるだけではないか、という疑問もありました。

高等部2年2学期のある日、ちょっとした事件が起きました。私はいつもの